

◆授業に関するアンケート◆

「2020 年度秋学期 授業に関するアンケート総評」

レジリエンス (Resilience)

教育開発支援センター長 若本夏美

はじめに

こんにちは。センター長の若本夏美です。

2020 年度は激動の年となりました。過去形で書くことは、新型コロナウイルス感染症が依然として猛威を振るっている現況では（2021 年 5 月ゴールデンウィークに執筆）憚られるものがありますが、少なくともこのような激震は、大学の在り方が根本から問い直された 1960 年代末の大学紛争以来であることは間違いありません。

同志社女子大学では、2020 年アカデミックイヤー、春学期の授業がほぼ全て遠隔授業、秋学期は一転、多くの授業が対面となりました（履修者数が多いなど本学が定める基準に抵触する授業科目のみ遠隔授業）。このような状況下で、春（遠隔授業）と秋（対面授業）の対比や総括はこの総評の手に余る所ですが、今後の議論に些少でも参考になるよう、秋学期授業アンケートの特徴を探っていきたいと思います。どうぞ最後までご覧下さい。

さて、ビジネスの世界では世界中でデジタル・テクノロジー利用のイノベーション（DX: Digital Transformation）が進められています。本学の授業アンケートも、2019 年度春学期より従来の紙媒体から manaba（通称、マナビー）を利用するデジタル形式に移行。GIGA スクール構想（Global and Innovation Gateway for All、文部科学省、nd）に代表されるように、教育界の DX 化は小学校から大学まで例外なく不可避なものと言えるでしょう。授業アンケートとは少し次元の異なる話ですが、2020 年度秋学期からの「授業振り返りシート」がメールでの送信方式から Web 上での回答方式に、更に 2021 年度春学期からは出欠管理に

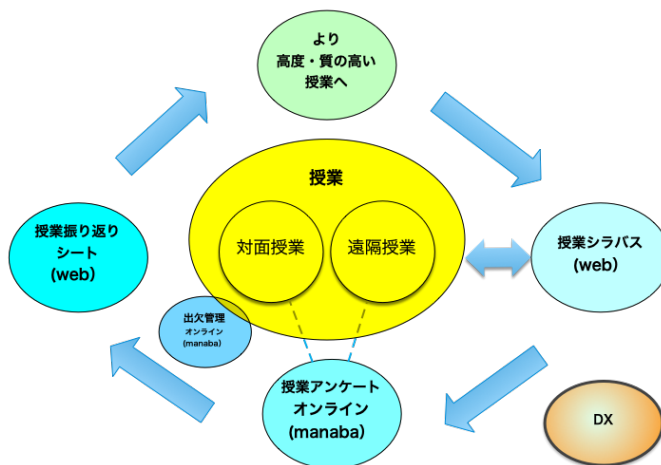


図 1. 同志社女子大学の DX による授業改善サイクル

も Respon（レスポンス）というデジタル方式が導入されました（図 1）。今後、本学でもこの DX の流れは更に加速していくものと考えられます。

一方で、何事も便利になったからと言って、結果も良くなるとは限りません。確かに便利

になりました。しかし、「便利とは手間がかからない一方でモチベーションの低下とスキルの低下が相乗効果を起こす場合がある」（川上、2019）との指摘があるように、DXによって失ったものも沢山あります。その最たるものが「授業アンケートの回答率の低下」にあります。

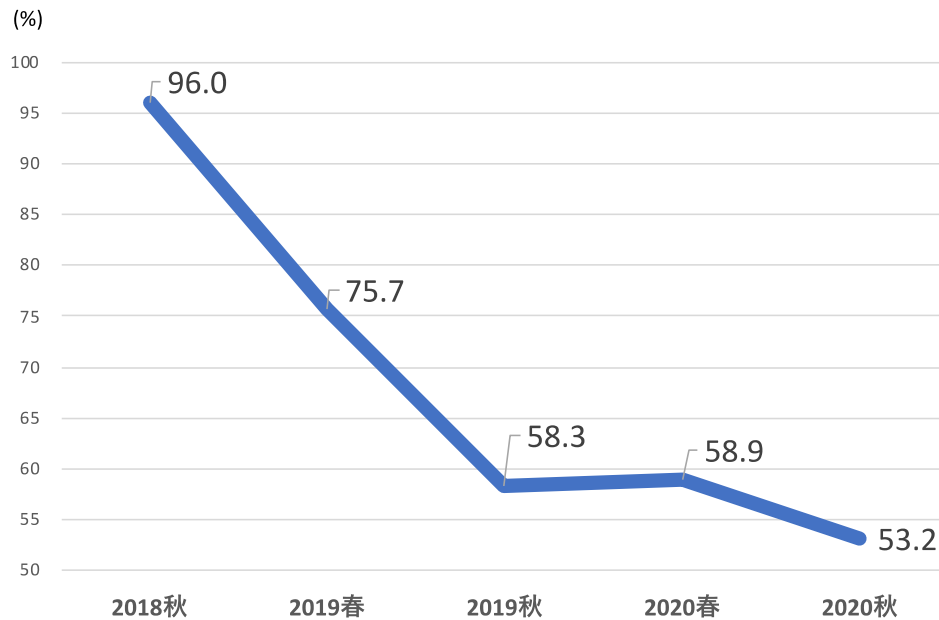


図 2. 授業回答率の推移（過去 3 年間）

図 2 が示す通り、右肩下がりの回答率低下には目を覆うばかりです。この総評でも過去 3 セメスターに渡り警鐘を鳴らしてまいりました。「利便性を図った結果…約 20%近く下がって…90%を超えた学科・科目区分は存在しません」（2019 年度春学期総評）、「…今回はそれよりも更に約 20%近く下がり 58.3%に…」（2019 年度秋学期総評）、「各学科の教務主任や教育開発支援センター運営委員の先生方の声かけがなければこの実施率は更に下がってしまっていた可能性すらあります」（2020 年度春学期総評）。

実際に、各学科毎に前年度の秋学期と比較してみると（図 3）、全 17 区分の中で 50%を上回ったのは 11 区分（64.7%）。最も回答率の高いのは「スポーツ・健康科目」（76.7%）、次いで「国際教養学科」（68.6%）、更に「食物科学専攻」（62.3%）、「管理栄養士専攻」（61.6%）、「食物科学専攻」（62.3%）、「英語英文学科」（61.0%）と続きます。1 年前の秋学期と比較して回答率が向上したのは「スポーツ・健康科目」（+7.3%）「管理栄養士専攻」（+5.2%）「国際教養学科」（+2.4%）「食物科学専攻」（+1.1%）。逆に下がってしまったのは「キリスト教・同志社関係科目」（-10.6%）、「日本語日本文学科」（-10.4%）、「英語英文学科」（-10.2%）、「人間生活学科」（-8.9%）、「外国語科目」（-8.7%）、「共通学芸科目」（-7.3%）、「社会システム学科」（-5.7%）、「教職に関する科目」（-5.5%）、「医療薬学科」（-5.0%）、「メディア創造学科」（-3.8%）、「音楽学科」（-3.8%）、「現代こども学科」（-3.1%）、「看護学科」（-0.6%）となっています。私が担当させていただいているこれまでの総評（2018 年度秋学期総評～2020 年度春学期総評まで）におけるグラフの Y 軸の尺度は 100%を最高値にし

てまいりましたが、今回は残念ながらその必要性も薄れ、80%が最高値になっています。
この回答率の低下の原因とその対策についても、教育開発支援センター運営委員会でこれ

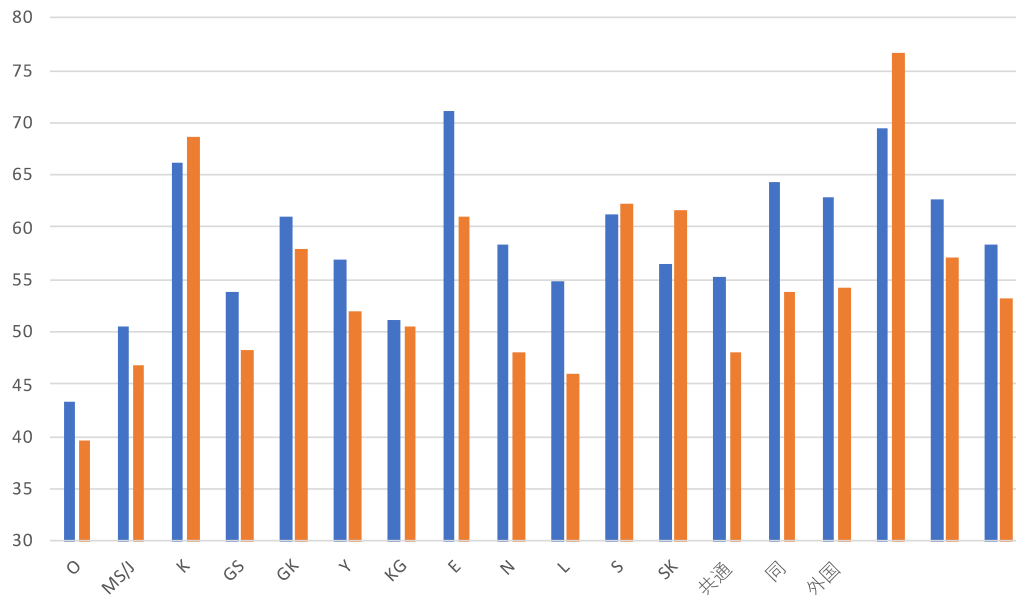


図 3. 授業アンケートの実施率推移（秋学期：2019 年-2020 年度：グラフ中の各学科・科目区分は p.16 に表示）

まで何度も議論を重ね、深め、可能な手立ては講じて参りました。

- 実施時期・期間に問題があるのではないか（原因）
 - （対策）実施期間を長く設定してはどうか？
 - ☆ （問題）実施時期を早くに設定すると、各科目担当教員が授業アンケートの回答を指示を出す前に、学生が先にアンケートを回答してしまい、任意設定の設問に回答できないという問題が発生する
（2020 年度春学期は従来より 1 週間遅らせることにした）
- 授業アンケートに回答するメリットが学生に感じられない（原因）
 - （対策）授業アンケートへの回答をしないと単位が出ない仕組みにしてはどうか。
 - ☆ （問題）大前提として、本学の授業アンケートは、授業アンケートに回答することを成績評価基準にはしない、学生が任意に回答するという認識で始めているため、それを変えるとなると根本的に授業アンケートを再検討する必要があるため難しい。
- 授業アンケートを実施するのを教員が忘れてしまう（原因）

- （原因）紙ベースの場合には実施しないと現物が残ってしまうが、manaba 実施であると、授業アンケートの存在自体を忘れてしまう。実施したかどうかすら憶えていないことがある。
- （原因）担当科目数が多すぎて（国立大学と比較し）授業アンケートの数自体が多くなりすぎる。
- （対策）教員への周知徹底方法を検討する。例えば、各学科で授業アンケート実施チェックリストを作成し、実施したかどうかを確認する。
- ☆ （問題）根本的解決にならない可能性がある。確認する主体が不明、煩雑になりすぎる、嘱託講師に対応出来ない。

また、日本国内の主要な女子大学や関西の主だった大学とも連携し状況確認をして参りましたが、共通しているのは「デジタル化を進める中で授業アンケートの回答率が低下してしまった」という点です。先の京都大学の川上浩司先生がおっしゃるように便利になった分、失うものが大きいのかも知れません。

現時点では決定的な解決策は存在しないようです。しかし、「学生—教員—大学」この三者が「Win-Win-Win」の関係になるほか、解決の糸口は見出すことはできないのではないのでしょうか。新型コロナウイルス感染症の影響のため、大学で学ぶことの意義、対面授業の意味、遠隔授業の新たな可能性を議論し始めた現在であるからこそ、教員と学生が互いに協力しながら高度で質の高い授業を構築するために、同志社が掲げる建学の理念と同志社女子大学の Vision 150 のもと、PDCA サイクルの意義（図 1）をもう一度、三者が真摯に考えてゆく必要があると考えます。この総評を機にそのような議論がこの同志社女子大学で沸き起こることを念願するところです。

さて、本年度の結果について、これまで蓄積してきた授業アンケートとも比較しながら、以下、概観してみたいと思います。この総評は、既に教務部で分析された「報告書」をもとに総括することを意図しています。

2020 年度秋学期の授業アンケートについて、前回（2020 年度春学期）よりの変更点はありません。ただ、秋学期多くの授業が対面型となりましたが、遠隔授業も依然として存在したため、

① Q17 に「遠隔授業は滞りなく行われましたか？」の項目

を春学期同様、設問として残しました。

Q15. DWCLA10

「DWCLA10 の内、この授業の履修を通してその獲得や向上に役立ったと感じられるものをすべて選んでください」

今回最も注目すべき項目である DWCLA 10 に遠隔授業がどのような影響を与えていたか、という議論から始めたいと思います。

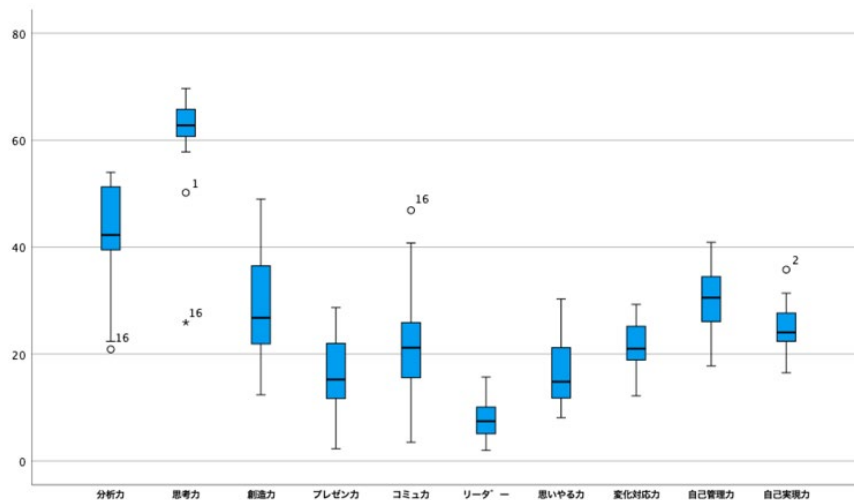


図 4. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10, 2020 秋)

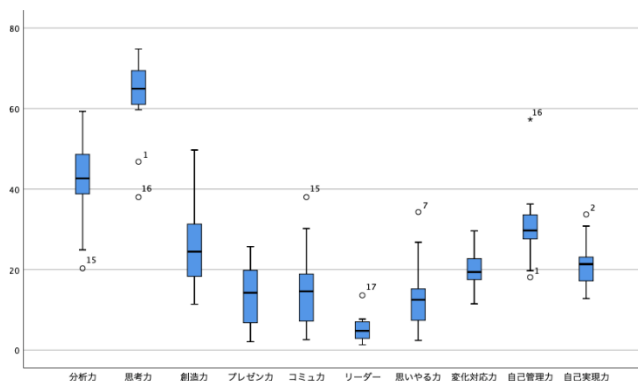


図 5. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10, 2020 春)

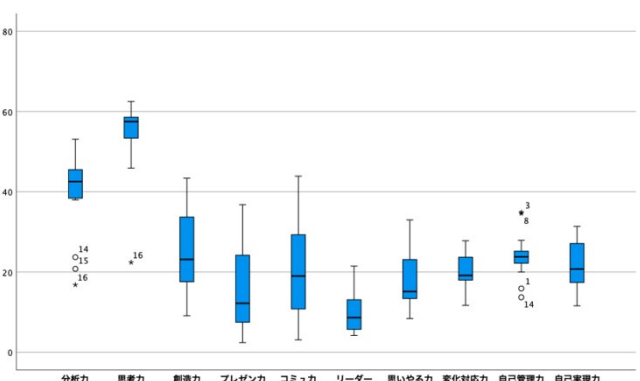


図 6. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10, 2019 秋)

2020 年度春学期と似通った結果ですが、比較すると（図 4, 5）興味深い結果に気づくことができます。

① 春学期（遠隔授業）に対して秋学期（対面授業）が上回った項目

- コミュニケーション力
- プレゼンテーション力
- 思いやる力
- 変化対応力
- 自己実現力

② 春学期（遠隔授業）に対して秋学期（対面授業）が下回った項目

- 思考力

③ 春学期（遠隔授業）に対して秋学期（対面授業）の方が個人差が拡大したもの

- コミュニケーション力
- リーダーシップ力
- 自己管理力

④ 春学期（遠隔授業）に対して秋学期（対面授業）の方が個人差が縮小したもの

- 分析力
- 思考力
- 自己実現力

遠隔授業は双方向オンライン型授業であれオンデマンド（動画配信）型授業であれ、個別学習が必然的に増加することになります。Zoom のブレイクアウト・ルームを利用したとしても、アイコンタクトが取れない、ノンバーバル・コミュニケーションがしづらいなど対面でのグループ活動とは大きく様相が異なります。対面授業になった秋学期、当然、コミュニケーション力やプレゼンテーション力は向上するでしょう。加えて、思いやる力、変化対応力、自己管理力、自己実現力も向上している点が注目されます。一方、思考力は春学期（遠隔授業）に対して秋学期（対面授業）が下回っています。2019 年度秋学期（対面授業）と 2020 年度春学期（遠隔授業）では思考力の向上、分析力及び自己実現力の個人差が遠隔授業で縮小していました。今回は対面授業の方がこの 3 つの項目の個人差が縮小しています。正反対の結果の理由は今後の検証を待つ必要があります。全てが同じ学生でもありませんので単純な比較はできないかもしれません。同じ秋学期（2019 年）と比較してみると（図 6）、思考力は中央値でも平均値でも 2020 年度秋学期の方が高くなっています。ひとつの可能性としては、今回は同年度のことであり、春学期の遠隔授業で既に身につけた分析力は遠隔授業でも維持されていたと考えられるかもしれません。つまり、春学期の遠隔授業と秋学期の対面授業の組み合わせは効果があるのかもしれません。対面授業が遠隔授業に対して 100%優れているわけではなく「組み合わせ方」が重要なのかも知れません。

DWCLA10 の中で最も選択率の高かった項目という点では、1 位) 思考力 (64.2%→60.9%)、2 位) 分析力 (41.4%→42.0%)、3 位) 自己管理力 (30.1%→30.1%)、逆に低かった項目は、10 位) リーダーシップ (5.2%→7.9%)、9 位) プレゼンテーション力 (13.9%→16.2%)、3 位) 思いやる力 (12.4%→17.1%) でした。全般的に、春学期よりも秋学期の方が平均値が高くなっている傾向にあります。

では、次に授業アンケートの各項目の結果結果にうつります。まず、遠隔授業の中で実施した授業アンケート結果の特筆すべき項目として Q15→17→5 の順に進めます。その後、Q2 以降は質問項目順により重要な項目に焦点を当てて分析したいと思います。また、この総評では大学全体の傾向を議論することを主目的とし、従来の学科・科目区別の結果分析については各学科で御議論いただく方がよいと考え、今回も省略します。

Q17. 遠隔授業

「遠隔での授業は滞りなく行われましたか?」

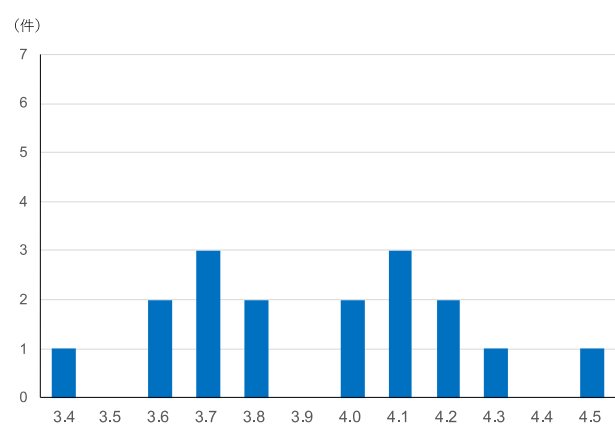


図 7. 遠隔授業実施 (Q17, 2020 秋)

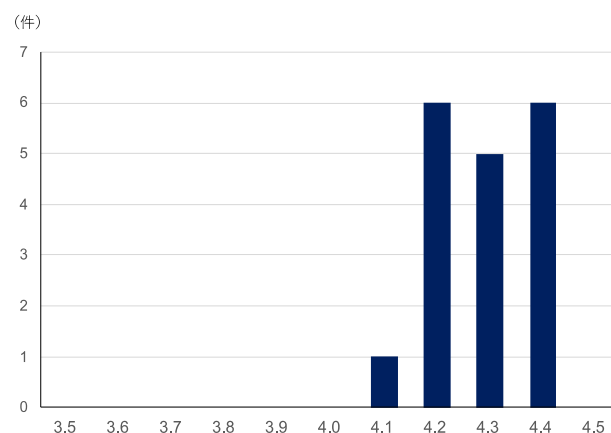


図 8. 遠隔授業実施 (Q17, 2020 春)

この項目は、春学期に引き続き、今回の授業アンケートで注目すべき項目であったと思われます。春学期（図 8）と比較して秋学期（図 7）の分散は拡大し、平均値は大幅に低下（ $M=3.9$ ）しています。これは、秋学期の遠隔授業は基本的にオンデマンド型であったことが影響していると思われます。言い方を変えるなら、オンデマンド型の遠隔授業の効果は授業準備やフィードバックに費やす教員の膨大な時間の割には学生からの評価は低いという事を示しています。今後も遠隔授業は継続的に実施されと考えられますが、その方法については熟考することが求められるでしょう。

Q5. フィードバック

「提出物に対するフィードバック(採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など)は効果的に行われていましたか」

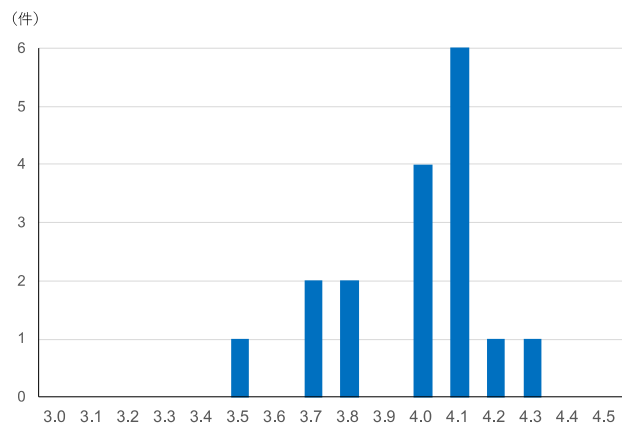


図 9. フィードバック (Q5, 2020 秋)

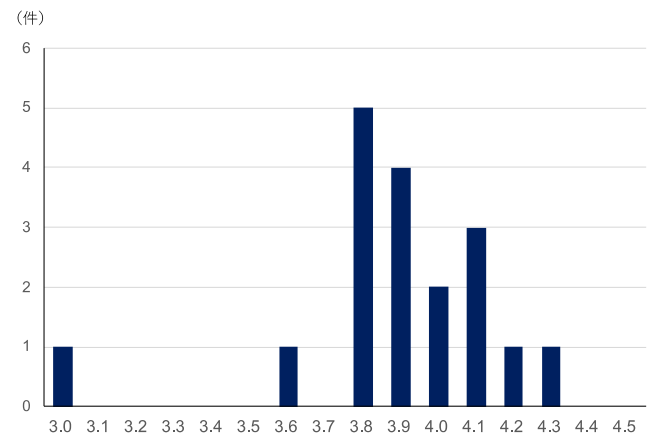


図 10. フィードバック (Q5, 2020 春)

この項目においてはやや学科・科目区分で相違が大きくなってしまっていますが、同じ区分の平均値が 4.0 (2019 年度春学期) → 3.9 (2020 年度春学期) → 4.0 (2020 年度秋学期) と微増という状況です。遠隔授業ではフィードバックの必要性が高く (manaba 上での提出物が多いため) その方法が煩雑になりがちです。フィードバックに関しては、対面授業に軍配が上がると言えるのかもしれません。

Q2. 受講生の理解度

「受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか」

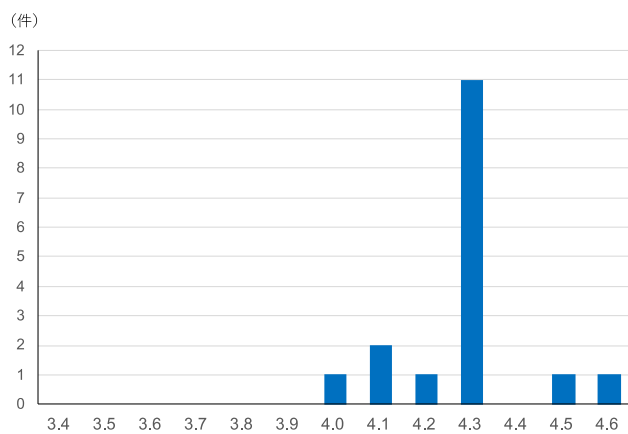


図 11. 理解度 (Q2, 2020 秋)

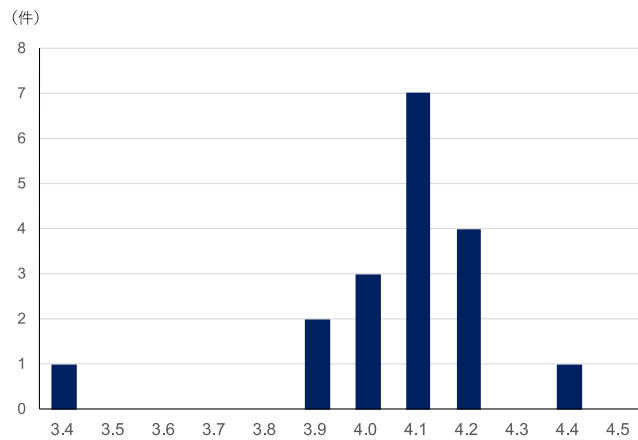


図 12. 理解度 (Q2, 2020 春)

同じ区分の平均値が 4.3 (2019 年度春学期) → 4.1 (2020 年度春学期) → 4.3 (2020 年度秋学期) という状況です。「受講生の理解度を確かめながら授業が進める」ことは重要な要素ですが、対面授業では理解しているかどうかは言葉だけでなく、顔の表情を見ているだけでも教員には理解できる利点があるように思われます。今後は対面授業だけでなく遠隔授業においても理解度を高める工夫やその学内交流が必要となってくると思います。

Q4. 授業の双方向性

「教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生または受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか。」

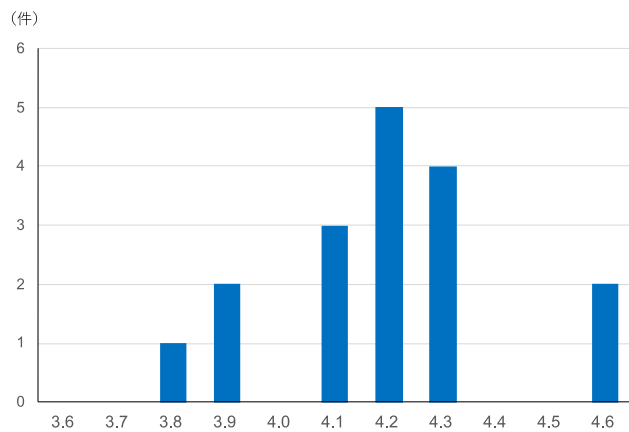


図 13. 双方向性 (Q4, 2020 秋)

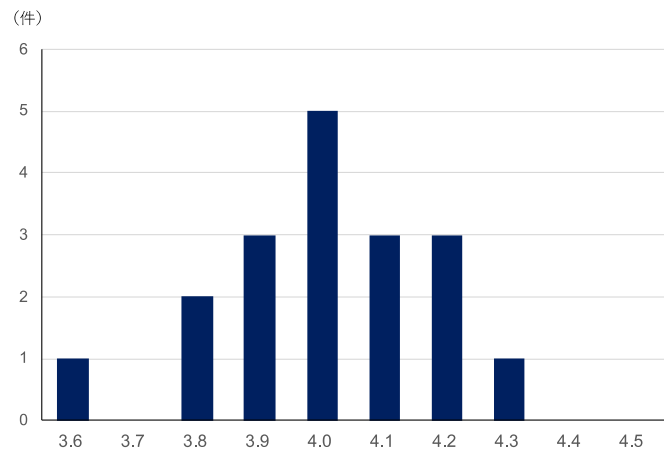


図 14. 双方向性 (Q4, 2020 春)

この項目においてはやや学科・科目区分で相違が大きくなってしまっています。同じ区分の平均値が 4.2 (2019 年度春学期) → 4.0 (2020 年度春学期) → 4.2 (2020 年度秋学期) という状況です。双方向性に関しては、対面授業の方が容易であるようです。

Q7. 自主学習

「自主学習を促す工夫がなされていましたか。」

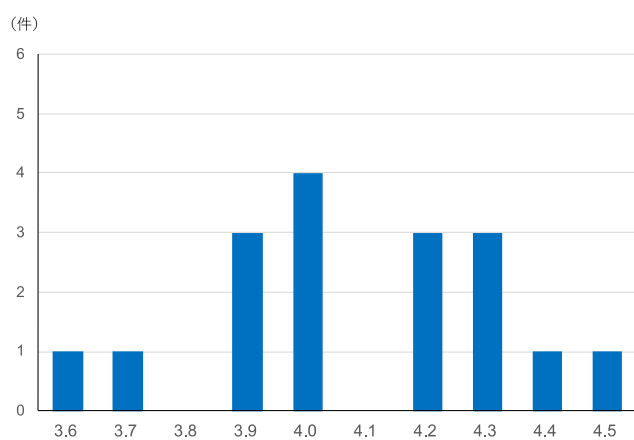


図 15. 自主学習 (Q4, 2020 秋)

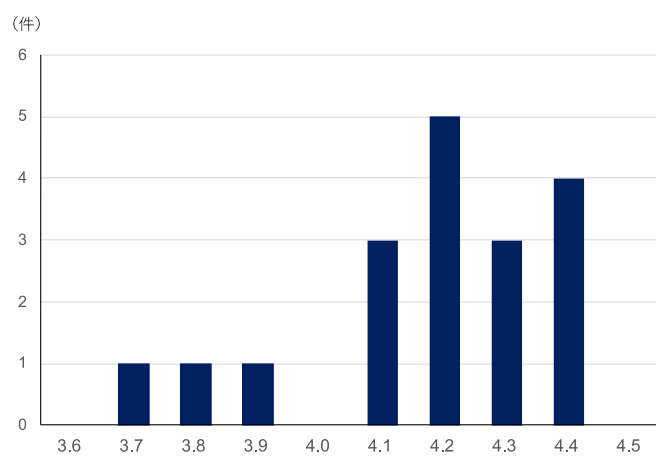


図 16. 自主学習 (Q4, 2020 春)

この項目においても学科・科目区分で相違が大きくなってしまっています。同じ区分の平均値が 4.0 (2019 年度春学期) → 4.2 (2020 年度春学期) → 4.1 (2020 年度秋学期) と春学期からは微減、2019 年秋学期と比較すると微増しています。同志社女子大学としては自主学習については最重点項目として「継続的に取り組む」必要がありますが、遠隔授業の方が自主学習は容易になるのかもしれませんが、学科科目群の特徴も合わせ今後検討を進めるが必要になると思います。

Q9. 自主学習

「この授業について、授業時間、予習、復習、自主学習すべて含めて1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。」

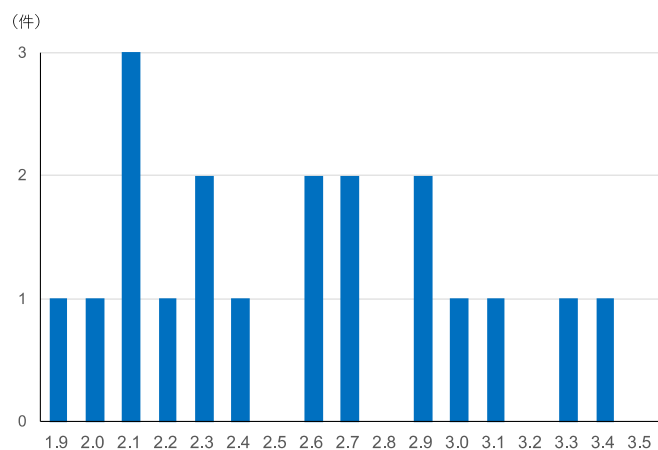


図 17. 授業外学習時間 (Q9, 2020 秋)

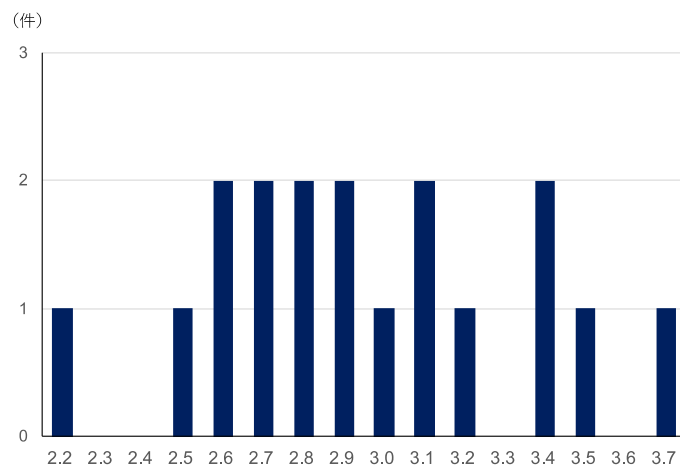


図 18. 授業外学習時間 (Q9, 2020 春)

同じ区分の平均値が 1.9 (2019 年度春学期) → 3.0 (2020 年度春学期) → 2.5 (2020 年度秋学期) と興味深い変化を示しています。春学期よりは減少していますが、1 年前の同じ秋学期よりは増加しています。ここにも遠隔授業 (春学期) + 対面授業 (秋学期) の組み合わせの効果があったのかもしれません。

Q14. 到達目標達成

「あなたは到達目標を達成できたと思いますか。」

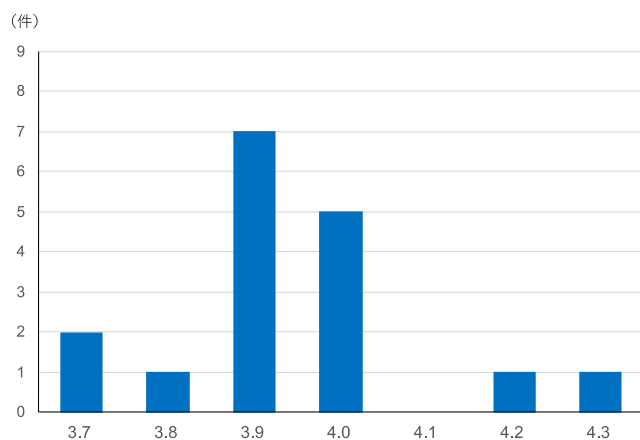


図 19. 到達目標達成 (Q14, 2020 秋)

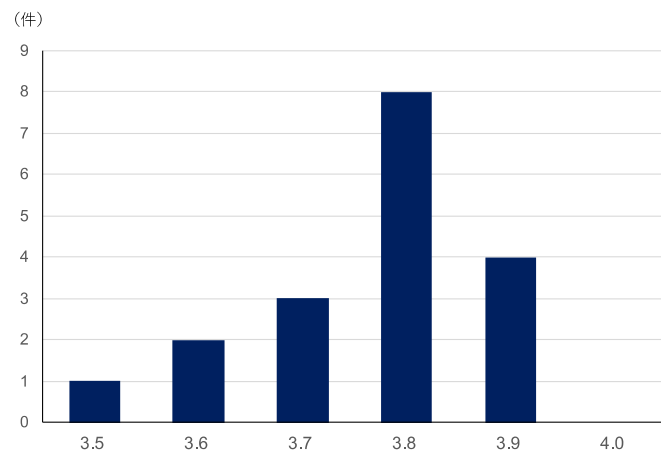


図 20. 到達目標達成 (Q14, 2020 春)

同じ区分の平均値が 3.8 (2019 年度春学期) → 3.8 (2020 年度春学期) → 3.9 (2020 年度秋学期) と微増しています。また前年度と比較すると各学科・科目群の相違が大きくなっているのも特徴です。対面授業の方が到達目標が達成しやすいのかもしれません。

まとめ

28,902名（2020年度春学期は34,287名）という膨大な数字が示す通り、いまや巨大プロジェクトとなった観のある授業アンケート。結果分析を見られてどのような感想を持たれたのでしょうか？

冒頭でも述べたとおり、対同年度春学期比で、回答者が5.7%、人数で約6000名（延べ）も減少していることは危機的な状況にあるのには変わりはありません。ただ、一方で、秋学期にほぼ全面的に対面授業になったことにより、春学期と比較して一層、充実した授業が展開されてきた姿が浮かびあがっています。教職員・学生諸姉・大学当局が英知を絞り、協力しながらよい授業を創り上げようと奮闘した成果であると思われます。

新型コロナウイルス感染症の影響は依然として深刻です。仮にこの新型コロナウイルス感染症の影響が収まったとしても、将来、同様の事態は起こらないとも限りません。2018年度、私は、イギリス・オックスフォード大学で1年間研究に専念する機会を頂きました（在外研究）。数多くのセミナーや講演会に（100以上！）参加し、専門分野だけでなく多種多様なお話（例えば、氷山の大きさをどうやって測る!? など）を拝聴しました。その中でよく耳にしたことばが「レジリエンス（Resilience）＝立ち直る力」でした。失敗することを恐れるな、とよく言われますが、実はその言葉だけでは不十分で、失敗を前提にそこから「いかに立ち上がるか」ということに成功の秘訣があるのだと感じました。雪の下のタンポポは厳しい冬を堪えて春に花を咲かせます。ひょっとしたら現在はそのような状況なのかもしれません。しかし、どのような状況下であろうとも、冷静かつ情熱的に授業を展開することによって、教員も学生もレジリエンスを兼ね備えた強靱な精神を培うことができるのだと思います。

教育開発支援センターはまず授業アンケートの回答率の回復を直下の目標に「教員と学生の上に立つ組織として、教員の授業内容・方法の改善および教育に対する意識の向上に向けて」組織的な取組みを続けてまいります。今後とも、センターへの変わらぬご支援・ご協力をお願いして、今回の総評を終わりたいと思います。最後まで読み進めていただき、ありがとうございました。

(総評メモ)

各学科へのコメントは学科間の差が大きすぎるため今回は見送りました。また、以下の項目は、重要度が低いと判断し分析対象から外しました。

Q1. シラバスとの合致

Q2. 受講生の理解度

Q3. 授業レベル

Q6. 理解を促進する工夫

Q10. 積極性

Q11. 授業や関連分野への意欲

Q13. 到達目標達成への指導

<凡例>

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学科科目
MS/J	メディア創造学科/情報メディア学科科目
K	国際教養学科科目
G S	社会システム学科科目
G K	現代こども学科科目
Y	医療薬学科科目
K G	看護学科科目
E	英語英文学科科目
N	日本語日本文学科科目
L	人間生活学科科目
S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
S K	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
共通	共通学芸科目
キ・同	キリスト教・同志社関係科目
外国	外国語科目
スポ・健	スポーツ・健康科目
教職	教職科目

参考文献：

川上浩司. (2019). なぜ遠足のおやつは 300 円以内なのか-人は不便じゃないと萌えない. 酒井敏, 小木曾 哲、山内 裕, 那須耕介, 川上浩司 (編) 「京大変人講座」. 三笠書房. pp. 137-178.

文部科学省. (nd). *GIGA*スクール構想の実現について.

https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm